
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ

（例）金を儲《もう》けて

|：ルビの付いていない漢字とルビの付く漢字の境の記号

（例）皆|嘘《うそ》だ。

私が巨万の富を蓄えたとか、立派な家を建てたとか、土地家屋を売買して金を儲《もう》けて居るとか、種々な噂《うわさ》が世間にあるようだが、皆|嘘《うそ》だ。

巨万の富を蓄えたなら、第一こんな穢《きたな》い家に入って居はしない。土地家屋などはどんな手続きで買うものか、それさえ知らない。此家だって自分の家では無い。借家である。月々家賃を払って居るのである。世間の噂と云うものは無責任なものだと思う。

先《ま》ず私の収入から考えて貰《もら》いたい。私にどうして巨万の富の出来よう筈《はず》があるか
と云うと、ではあなたの収入は？と訊《き》かれるかも知れぬが、定収入といったら朝日新聞から貰って居る月給である。月給がいくらか、それは私から云って良いものやら悪いものやら、私にはわからぬ。聞きたければ社の方で聞いて貰いたい。それからあとの収入は著書だ。著書は十五六種あるが、皆印税になって居る。すると又印税は何割だと云うだろうが、私のは外《ほか》の人のより少し高いのだそうだ。これを云ってしま《しま》っては本屋が困るかも知れぬ。一番売れたのは『吾輩は猫である』で、従来の菊判の本の外《ほか》に此頃縮刷したのが出来て居る。此の両方合せて三十五版、部数は初版が二千部で二版以下は大抵千部である。尤《もっと》も此三十五版と云うのは上巻で、中巻や下巻はもっと版数が少い。幾割の印税を取った処が、著書で金を儲《もう》けて行くと云う事は知れたものである。

一体書物を書いて売るという事は、私は出来るならしたくないと思う。売るとなると、多少慾が出て来て、評判を良くしたいとか、人気を取りたいとか云う考えが知らず知らずに出て来る。品性が、それから書物の品位が、幾らか卑《いや》しくなり勝ちである。理想的に云えば、自費で出版して、同好者に只《ただ》で頒《わか》つと一番良いのだが、私は貧乏だからそれが出来ぬ。

衣食住に対する執着は、私だって無い事はない。いい着物を着て、美味《うま》い物を食べて、立派な家に住み度《た》いと思わぬ事はないが、只《ただ》それが出来ぬから、こんな処で甘んじて居る。

美服は好きである。敢《あえ》て流行を趁《お》う考も無いし、もう年を取ったからしゃれても仕方が無いと思って居るので、妻の御仕着せを黙って着て居るが、女などがいい着物を着たのを見ると、成程《なるほど》いいと思う。

食物は酒を飲む人のように淡泊な物は私には食えない。私は濃厚な物がいい。支那料理、西洋料理が結構である。日本料理などは食べたいとは思わぬ。尤《もっと》も此支那料理、西洋料理も或る食通と云う人のように、何屋の何で無くてはならぬと云う程に、味覚が発達しては居ない。幼穉《ようち》な味覚で、油っこい物を好くと云う丈《だけ》である。酒は飲まぬ。日本酒一杯位は美味《うま》いと思うが、二三杯でもう飲めなくなる。

其の代り菓子食う。これとても有れば食うと云う位で、態々《わざわざ》買って食いたいと云う程では無い。煎茶《せんちゃ》も美味《うま》いと思って飲むが、自分で茶の湯を立てる事は知らぬ。莧《たばこ》は吸って居る。一事止した事もあったが、莧を吸わぬ事が別に自慢にもならぬと思ったから、又吸い出した。余り吸って舌が荒れたり胃が悪くなったりすれば一寸《ちょっと》止すが、癒《なお》れば又吸う。常に家に居て吸って居るのは朝日である。値段は幾らだか知らぬが、安いのであろうが、妻がこれ許《ばか》り買って置くから、これを飲んで居る。外に出て買う時に限って敷島《しきしま》を吸うのは、十銭銀貨一つ投《ほう》り出せば、釣銭《つりせん》が要《い》らずに便利だからである。朝日より美味《うま》いか如何《どう》か、私には解らぬ。

家に対する趣味は人並に持って居る。此の間も麻布《あざぶ》へ骨董屋《こっとうや》をひやかしに出掛けた帰りに、人の家をひやかして来た。一寸《ちょっと》眼に附く家を軒毎《のきごと》に覗《のぞ》き込んで一々点数を付けて見た。私は家を建てる事が一生の目的でも何でも無いが、やがて金でも出来るなら、家を作って見たいと思って居る。併《しか》し近い将来に出来そうも無いから、如何《どう》云う家を作るか、別に設計をして見た事はない。

此家は七間ばかりあるが、私は二間使って居るし、子供が六人もあるから狭い。家賃は三十五円である。家主

は外《ほか》との釣合があるから四十円だと云って呉《く》れと云って居るが、別に嘘《うそ》を云う事もないと思って、人には正直に三十五円だと云って居る。家主が怒るかも知れぬ。地坪は三百坪あるから、庭は狭い方では無い。然《しか》し植木は皆自分で入れたのだから、こんな庭の附いている家としたら、三十五円や四十円では借りられないだろう。植木屋と云うものは勝手なもので、一度手入れをさせたら、こっちで呼ばないのに、時々若い者を連れて仕事にやって来る。物の一月余りもこちこち其処辺《そこら》をいじって居る事がある。別に断わるのも妙だと思って、何とも云わずに居るが、中々金がかかる。

私はもっと明るい家が好きだ。もっと奇麗《きれい》な家にも住みたい。私の書斎の壁は落ちてるし、天井《てんじょう》は雨洩《あまも》りのシミがあつて、随分《随分》穢《きたな》いが、別に天井を見て行って呉《く》れる人もないから、此儘《このまま》にして置く。何しろ畳の無い板敷である。板の間から風が吹き込んで冬などは堪《たま》らぬ。光線の工合《ぐあい》も悪い。此上に坐《すわ》って読んだり書いたりするのは辛《つら》いが、気にし出すと切りが無いから、閑《かま》わずに置く。此間或る人が来て、天井を張る紙を上げましよう云って呉れたが、御免《ごめん》を蒙《こうむ》った。別に私がこんな家が好きて、こんな暗い、穢《きたな》い家に住んで居るのではない。余儀なくされて居るまでである。

娯楽と云うような物には別に要求もない。玉突は知らぬし、囲碁《いご》も将棋《しょうぎ》も何も知らぬ。芝居は此頃何かの行掛り上から少し見た事は見たが、自然と頭の下るような心持で見られる芝居は一つも無かった。面白いとは勿論《もちろん》思わぬ。音楽も同様である。西洋音楽のいいのを聞いたら如何《どう》か知らぬが、私は今までそう云う西洋音楽を聞いた事の無い為《せい》か、未《ま》だ一度も良い書画を見る位の心持さえ起した事は無い。日本音楽などは尚更《なおさら》詰らぬものだと思う。只《ただ》謡曲《うた》や丈《だ》けはやって居る。足掛六七年になるが、これも怠《なま》けて居るから、どれ程の上達もして居ない。下《しも》がかりの宝生で、先生は宝生新氏である。尤《もっと》も私は芸術のつもりでやって居るのではなく、半分運動のつもりで唸《うな》るまでの事である。

書画だけには多少の自信はある。敢《あえ》て造詣《ぞうけい》が深いというのでは無いが、いい書画を見た時《許《ばか》り》は、自然と頭が下るような心持がする。人に頼まれて書を書く事もあるが、自己流で、別に手習いをした事は無い。真《ほんと》の恥を書くのである。骨董《こつとう》も好きであるが所謂《いわゆる》骨董いじりではない。第一金が許さぬ。自分の懐都合《ふところつごう》のいい物を集めるので、智識は悉無《しつむ》である。どこの産だとか、時価はどの位だとか、そんな事は一切知らぬ。然し自分の気に入らぬ物なら、何万円の高価な物でも御免《ごめん》を蒙《こうむ》る。

明窓浄机《めいそうじょうき》。これが私の趣味であろう。閑適を愛するのである。

小さくなって懐手《ふところ》でして暮したい。明るいのが良い。暖かいのが良い。

性質は神経過敏の方である。物事に対して激しく感動するので困る。そうかと思うと、又神経遅鈍な処もある。意志が強くて押える力のある為めと云うのでは無かろう。全く神経の感じの鈍い処が何処《どこ》かにあるらしい。

物事に対する愛憎《あいぞう》は多い方である。手廻りの道具でも気に入ったの、嫌《きら》いなのが多いし、人でも言葉つき、態度、仕事の遣《や》り口《くち》などで好きな人と嫌いな人がある。どんなのが好きて、どんなのが嫌いかと云う事は、何《いず》れ又記す機会があろうと思う。

朝は七時過ぎ起床。夜は十一時前後に寝るのが普通である。昼食後一時間位、転寝《うたたね》をする事があるが、これをすると頭の工合《ぐあい》の大変よいように思う。出不精《でぶしょう》の方で余り出掛けぬが、時々散歩はする。俗用で外出を已《や》むなくされる事も、偶《たま》には無いではない。人を訪問に出る事はあるが、年始とか盆とかの廻礼などは絶対にしない。又する必要はないと考えて居る。

執筆する時間は別にきまりが無い。朝の事もあるし、午後や晩の事もある。新聞の小説は毎日一回ずつ書く。書き溜《た》めて置くと、どうもよく出来ぬ。矢張《やはり》一日一回で筆を止めて、後は明日まで頭を休めて置いた方が、よく出来そうに思う。一気呵成《いっきかせい》と云うような書方はしない。一回書くのに大抵三四時間もかかる。然し時に依ると、朝から夜までかかって、それでも一回の出来上らぬ事もある。時間が十分にあると思うと、矢張長時間かかる。午前中きり時間が無いと思ってかかる時には、又其の切り詰めた時間で出来る。

障子《しょうじ》に日影の射した処で書くのが一番いいが、此家ではそんな事が出来ぬから、時に日の当る縁側《えんがわ》に机を持ち出して、頭から日光を浴びながら筆を取る事もある。余り暑くなると、麦藁帽子《むぎわらぼうし》を被《かぶ》って書くような事もある。こうして書くと、よく出来るようである。凡《すべ》て明るい処がよい。

原稿紙は十九字詰十行の洋罫紙《ようけいし》で、輪廓《りんかく》は橋口五葉君に画いて貰ったのを春陽堂に頼んで刷らせて居る。十九字詰にしたのは、此原稿紙を拵《こし》らえた時に、新聞が十九字詰であったからである。用筆は最初Gの金ペンを用いた。五六年も用いたろう。其後万年筆にした。今用いて居る万年筆は二代目のオノトである。別にこれがいいと思って使っているのでも何でも無い。丸善の内田魯庵君に貰ったから、使っているまでである。筆で原稿を書いた事は、未《ま》だ一度もない。

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出：「大阪朝日新聞」

1914（大正3）年3月22日

底本は、「談話」の項におさめた本作品の表題に、かぎ括弧を付けて示している。

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年4月27日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。